

別府竹細工の歴史

別府市の竹細工の生産は、景行天皇がこの地域で高品質の竹を見つけ、それらの竹を使って籠を作った1世紀頃にまでさかのぼるとされています。

そして17世紀から19世紀にかけて、湯治のための温泉地として別府の人気の高まるにつれ、多くの観光客が竹を使ったお土産などを購入したことで、別府の竹細工産業をさらに成長させたのです。そして19世紀から20世紀にかけて観光地としてさらに発展を続けた別府は、装飾や芸術を目的とした竹細工製品の生産を促進し、大分県竹工芸訓練センターなどの研修施設や研究施設が作られ、より多くの職人の養成につながったのです。

また、新しい竹細工製品の開発や、輸出などを通じた販売の拡大を図るため、別府に専門家による協会が設立されました。その間、地元の竹細工職人たちは新しい工芸技術を生み出し、またその技術を次世代に伝え、竹細工の用途を拡大し、竹細工を芸術のレベルにまで高めたのです。そして1967年、別府生まれの生野祥雲斎（1904年～1974年）は竹細工の分野で人間国宝に指定された最初の人物となり、また別府の竹細工は1979年に日本の伝統的工芸品に指定されたのです。

この伝統的な竹細工を作る訓練を受けた職人の数は年々減少しており、残っている職人のほとんども高齢です。しかし職人や竹細工の愛好家たちは、素材としての竹とその伝統工芸である竹細工の魅力を、より多くの人に引き継がれることを望んでいるのです。